

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 62 September 1983

コウトウチビクワガタについて

境野広行* 越智輝雄**

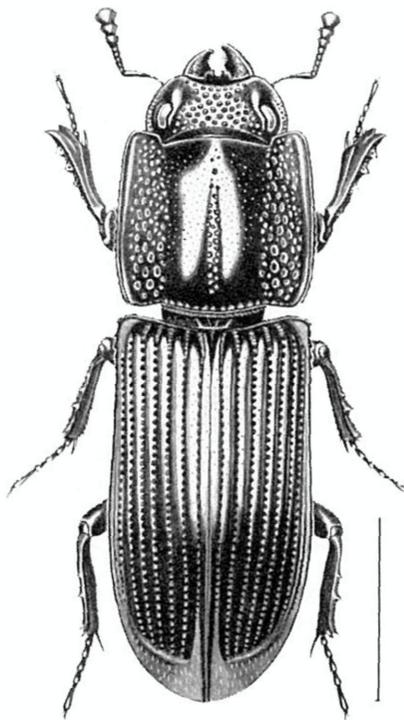
台湾の南東海上に浮ぶ小島、蘭嶼（紅頭嶼）は、台湾本島より至近の距離にありながら、その昆虫相はフィリピンなどより南方の要素が多く入り込んでおり鹿野忠雄博士がウォーレス線を修正したことは有名である。クワガタムシ科も、その特色を裏づけるのに例外ではない。しかし、一方では戦前の断片的な記録以外、ほとんど新知見も無いまま今日に至り、既知種中にも数種の疑問種を含んでいたが依然として解明されないままであった。現在まで蘭嶼から記録のあるクワガタムシ科甲虫は、ヒメヒラタクワガタ *Metalactulus parvulus* HOPE et WESTWOOD, コウトウツノヒョウタンクワガタ *Nigidius baeri* BOILEAU, クロサビクワガタ *Gnaphaloryx opacus* BURMEISTER, コウトウチビクワガタ（種名は後述）の4種で、このうちヒメヒラタクワガタとコウトウツノヒョウタンクワガタは、近年も採集されているが、クロサビクワガタはどうやら「素木標本」らしく、同島の分布は疑いなので、今のところはそのファウナより除いた方がよいようである。残りの1種、コウトウチビクワガタも後に述べる理由により長らくその存在に疑問が持たれていたが、今回同島より採集された *Figulus* 属の1種がそれに該当することが判明したので報告しておきたい。

本文に先だち、日頃より御指導を賜わり比較標本の閲覧に便宜を計っていただいた黒澤良彦博士、岡島秀治博士、標本を提供していただいた採集者の松田潔氏、全型図を用意していただいた笠原須磨生氏

に心よりお礼申し上げる。

今回記録する種について述べる前に、所謂コウトウチビクワガタは今までの扱いに種々の問題があるので、最初にその点に触れておきたい。

本種の蘭嶼からの記録に関する文献は次の2編がある。



コウトウチビクワガタ *Figulus fissicollis* FAIRMAIRE

1. Y. MIWA et M. CHŪJŌ (三輪勇四郎・中條道夫), 1936: *Catalogus Coleopterorum Japonicorum* (日本産鞘翅目分類目録) (2), Lucanidae, p. 10.

この中で初めて蘭嶼からコウトウチビクワガタ *Figulus laticollis* REICHE を記録したが、※印の注釈を附して、「Collected by T. KANO from Kotosho in May, 1936.」と記している。しかしそれ以上の詳細な報告は、目録の発行前後にも何ら見あたらない。

2. 平山修次郎, 1939: 本館所蔵日本産鍬形虫科の解説(II) 蟲の世界, 3: 142—143. pl. 16, fig. 4.

平山氏はその年(1939年)に採集された標本を入手、当時の平山博物館に所蔵し、上記目録に従って記録した。解説の中で簡単な記載をし故金子富雄氏の画いた図も掲げている。

次に *Figulus laticollis* REICHE なる種について検討してみると以下の通りである。

本種は ESCHSCHOLTZ (1837: *Dejean, Cat. Col.*, ed. 3, p. 194.) によってフィリピン産に対して与えられた種名であるが、PARRY (1864: *A Catalogue of Lucanoid Coleoptera. Trans. ent. Soc. Lond.*, (3), 11.) では脱落、同

じく PARRY (1870: A Revised Catalogue of the Lucanoid Coleoptera, Trans. ent. Soc. Lond., p. 115) では THOMSON (1862: Ann. Soc. ent. Fr. 2, p. 402) を命名者に引用, さらにそれ以前に REICHE (1853: Ann. Soc. ent. Fr., I, p. 84) が本種を扱っているが, こちらの方は VAN ROON (1910: Coleopterorum Catalogus, pars 8, Lucanidae, p. 52) が命名者として引用しているといった具合に, その時点でもきわめて理解しにくい疑問種と言える。時下って DIDIER et SÉGUY (1953: Catalogue Illustré des Lucanides du Globe) は, わざわざ目録中に含めているものの巻頭の “Nota” では削除すると述べられており, BENESH (1960: Coleopterorum Catalogus, Supplementa, pars 8, Lucanidae) では “Nomina nuda” の項に含め初めて無効名としての扱いを明瞭に示している。

以上のように本種は BENESH の賢明な扱いを踏襲するまでもなく, 命名規約に従った記載のない実体を伴わない種名で, 当然ながら使用することはできない。では, 蘭嶼で鹿野博士が採集したという *Figulus* 属の 1 種に, 前出の三輪・中條はなぜ *laticollis* を当てたのかとの疑問が生じるが, 本種が同日録に掲載されるまでの経緯は, 知る由も無いので, その点に関しては残念ながら不明である (ただし, 学名は VAN ROON のカタログに従っていることは, 命名者を REICHE にしていることから窺える)。また, 現在国立科学博物館に所蔵される鹿野博士の標本中にも, それに相当するものは見あたらない。平山氏も蘭嶼で *Figulus* 属のクワガタが採集されればそれがコウトウチビクワガタであると疑いも持たずに速断したのは, 日本及び台湾にも産するマメクワガタとチビクワガタからも容易に区別できる種であれば, 上記の目録の出版を受けて当然の扱いで, ましてそれ以外の *Figulus* が産するなどとは考えもしなかったことと思われる。

以上のように蘭嶼産のコウトウチビクワガタについては, 今まで十分な検討がされたことは無く, さらに平山氏が示した種が実際にはどの種に核当るとのかとの新たな疑問も惹き起こされる。

さて, 今回報告する蘭嶼で採集された *Figulus* 属の 1 種は, FAIRMAIRE が 1849 年に Tongatabu (トンガ) より記載し, フィジー, ギルバート, グアム, パラオ, サモア, フィリピンなどにも産する *fissicollis* で, 筆者らが検したフィリピン産の標本及び記載ともよく一致し, 他種との区別は容易であった。しかも, 前述の平山氏の示したコウトウチビクワガタに図・記載ともやはり一致し, 本種 *fissicollis* の和名にコウトウチビクワガタを当てるのが妥当との結論を得ることができた。平山氏は三輪・中條の目録に従ったままで種名は適切でないが, 和名の方はそれが指し示す昆虫を表わす限り, その時点からコウトウチビクワガタの存在は生かされるべきで, 今回を以って正確な種名が判名したということになる。なお, 筆者の 1 人境界は確認の意味で旧平山コレク

ションの調査を行ったが, 残念ながらコレクションのほとんどが戦後散逸してしまい, 一部実見できた標本の中には該当するものは見出せなかった。

コウトウチビクワガタ

Figulus fissicollis Fairmaire, 1849. Rev. Mag. Zool. (2) 1, p. 414.

体長: 7.4mm, 幅: 2.2mm. 体は小型で細長く, 光沢のある黒色。脚と体の側縁部は僅かに暗赤褐色を帯びる。

頭部は幅広く扁平, 上面は一樣に粗大な点刻を装う。前縁は彎入し, 頭楯は丸味を帯びた台形, 眼縁突起は眼を完全に縁どり, ほぼ弧状を呈して展張する。大腿は小型で中央に 1 鈍歯を具う。

前胸は頭部より遙かに幅広く, 後方 1/3 のところで最大, 長さより僅かに幅広く, その比は約 1.05。前角は凡そ台形に突出して眼縁突起後縁に達し, 側縁は鋸歯状を呈する。上面は外縁部及び中央縦溝に粗大な点刻を装うが, それ以上の中央域は扁平で滑らか。

翅鞘は前胸背後縁と略同幅で幅と長さの比は約 1.95, 肩部は弱く反り返って僅かに突出する。側縁の前方 1/2 はほぼ平行で, 更にその側縁前部の短い区間は鈍い鋸歯状になる。背面は平滑で 9 條の縦溝を装い, 各縦溝内は点刻を列するが, 外縁の 2 條は縦溝が不明瞭で点刻列のみとなる。

檢視標本: 1 頭, 蘭嶼, 24. iii. 1971, 松田 潔 採集。1 頭, Mainit Spa, Mindanao, Philippines, 28. vii. 1970, M. Sato leg.

参考文献 (本文中に引用したものを除く)

ARROW, G. J., 1927. Insects of Samoa. 4, Coleoptera (Lamellicornia): 64. London (B. n.).

— 1943. On the genera and nomenclature of the Lucanid Coleoptera, and descriptions of a few new species. Proc. ent. Soc. London, (B) 12: 133—143.

BENESH, B., 1950. Descriptions of new species of stagbeetles from Formosa and the Philippines. Pan Pacific Ent., 16: 49—57.

(*東京都港区, **大阪府池田市)

○訂正

筆者は, 本誌 59 号 (1982) に「奥尻島および北海道未記録のゴミムシダマシ」と題して 3 種を報告したが, この内ネジゴミムシダマシ *Tetraphyllus lunuliger* (MARSEUL) は, 既に松岡勝輝 (1937, 昆虫界 5 (39): 331) により奥尻島から記録されていた。この報文の存在は「新しい昆虫採集案内」により周知のこととなっているが参照しなかった筆者の怠慢であるので訂正すると共にお詫び申し上げる。なお御指摘いただいた千葉県山崎秀雄氏に御礼申し上げます。(神奈川県綾瀬市, 西川正明)

日本産クロコガネ属の追加記録

小林 裕和

筆者は、昨年本誌に「日本産コフキコガネ族概説(2)」を発表した。その中のクロコガネ属 (Genus *Holotrichia*) に、その後新たに記載された種があることが判ったので、前報の追加としてここに報告する。

11. *Holotrichia danjoensis* Y. MIYAKE et IMASAKA
ダンジョクロコガネ

体は暗褐色。背面は通常濃色。背面の光沢はクロコガネ (*H. kiotoensis*) やコクロコガネ (*H. picea*) とほぼ同様。頭楯は円形の点刻をかなり密に具える。前胸背の後縁には1列になった点刻列を欠く。尾節板はあらく点刻され、雄では中央でかなり中高となるが、雌では先端近くで横長の隆起を有し、先端は上から見てほぼ直線状となり、中央でかすかに彎入する。

分布：日本 (男女群島)。

本種は、長崎大学が1978年に長崎県男女群島の調査を行った際に採集された、2頭の雄および1頭の雌の標本に基づいて1982年に記載された。

本種の追加によって、検索表の一部は下記のように書き改められることになる。

- 8'. 北海道, 本州, 四国, 九州などに分布する。
尾節板は細かく点刻され、雄では中央で中高となるが、雌ではほぼ平坦で先端付近でかすかに高まる。体長 17~21.5mm.....
..... *kiotoensis* BRENSKE



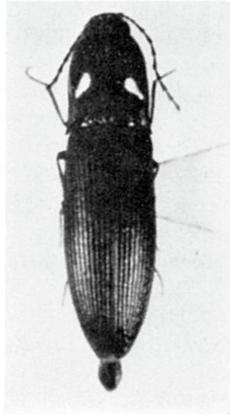
8''. 九州 (男女群島) に分布する。尾節板はあらく点刻され、雄では中央でかなり中高となるが、雌では先端近くで横長の隆起を有し、先端は上から見てほぼ直線状となり、中央でかすかに彎入する。体長 20~21.5mm.....

.....*danjoensis* Y. MIYAKE et IMASAKA (写真)

末筆ながら、本文を書くにあたりダンジョクロコガネの模式標本を貸与下さった三宅義一氏に心から感謝申し上げます。

○群馬県におけるクロホソキコメツキの採集例

クロホソキコメツキ *Procaerus cariniceps* (LEWIS, 1894) は、Kiga (木質, 奈良県) で採集された1頭の標本に基づいて (*Megapenthes* 属の新種として) 記載された筒型のコメツキムシであるが、かなり珍しい種類で、原記載以後国内では、札幌・中禅寺・大菩薩峠・奈良公園・京都広河原などからわずかに記録があるにすぎない。最近、筆者の1人佐藤は、群馬県において本種を採集することができたのでここに報告する。



1 ♀, 群馬県碓氷郡霧積, 23-24. v. 1981, 佐藤英夫採集。

本種は種小名が示すように、頭部には1本の縦隆線を有し、本属に含まれる他の種とは容易に区別することができる。

(東京農大, 鈴木 亙; 東京都, 佐藤英夫)

○栗の花に来たコクワガタ

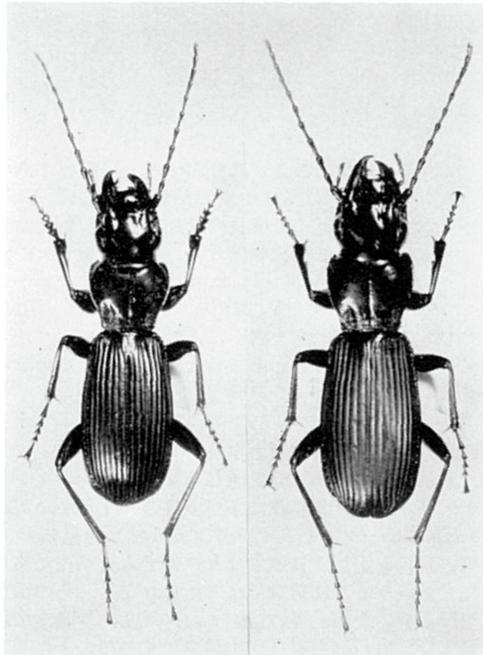
本誌43号 (1978) 誌上で私はフィリピンのミンダナオ島でユーカリの花に来た多数の *Protopopocilus occipitalis* (ノゴリクワガタの1種) を見て大変驚いた旨を記し、日本ではクワガタムシが花に来るなどということは常識では考えられなく、その様な記録も全くないと書いた。また、同誌同号誌上で境野広行氏も台湾南投県廬山温泉で栗の花に来たヒメミヤマクワガタ *Lucanus swinhoei* の♀を採集された旨を記録しておられる。しかるに、今年 (1983) 5月30日の正午頃、東京都世田谷区岡本3丁目の自宅に隣接する栗園の高さ約3m程の栗の木の咲きかけの花にかなり大型のコクワガタ *Macroborcas relictus* 1♂ が来ているのを発見して、私は再度驚かされることになった。日本でもクワガタムシ類が花に来ることがあるなどは毛頭考え及ばなかった。あるいは、どなたかすでにこの様な例を観察しておられる方があるかも知れないが、私には、日本では全く初の経験であったので記録しておく。ちなみに、当時私の家の付近には樹液の出ている樹は1本もなかった。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ヒコサンオオズナガゴミムシ長崎県多良岳の記録

ヒコサンオオズナガゴミムシ *Pterostichus macrocephalus* HABU, 1955¹⁾ は、福岡県英彦山産の 1 ♀ を基に記載された種である。体形は細長く、特に頭部が大きい。眼は著しく小さく、大顎は左右不対称で、左側がより大きく長い。前胸は比較的小さい。上翅は細長く、両側はほぼ平行で、♀では微細印刻をよそおい、ツヤ消し状となる。

本種は、記載以後ごく最近までまったく記録がなかったが、阪口、1981²⁾ が、佐賀県多野岳産として 1 ♂ 1 ♀ の写真を示して解説を加えた。

筆者らは、本種を長崎県多良岳の標高 800~900 米附近の石下より採集しているので、新産地として記録しておきたい。



多良岳産ヒコサンオオズナガゴミムシ
左 ♂ 右 ♀

長崎県多良(岳)岳, 2 ♂ 1 ♀, 2. vi. 1969, 大谷採集。1 ♀, 10. v. 1983; 3 ♂ 2 ♀ ♀, 24. v. 1983, 今坂採集。

なお、阪口(前出)によって図示された 1 ♂ 1 ♀ は、上記の大谷採集品の一部を使用したものであり、佐賀県多野岳は、長崎県多良岳の誤りであるので訂正しておきたい。

今のところ、本種の分布は、福岡県英彦山と長崎県多良岳(いづれもブナ帯)の九州北部に限られている。阪口(前出)によると、対馬と朝鮮半島にも、それぞれ、本種とよく似た近縁種が分布しているようである。

1) HABU, A., 1955. Bull. Nat. Inst. Agr. Sci., Ser. C, 5: 148-151, 153, 156, fig. 3

2) 阪口浩平, 1981. 図説世界の昆虫, 5, ユーラシア編: 70-73.

(大阪府枚方市, 大谷規夫・長崎県島原市, 今坂正一)

○伊豆御蔵島から新記録のハネカクシ

(ハネカクシ科分布資料 11)

御蔵島のハネカクシ類については WATANABE (1961, 農学集報, 6: 348-356) および沢田・渡辺 (1969, 農学集報, 4: 1-48) によって既に 38 種が記録されているが、本年、筆者の一人長谷川によって、下記の同島未記録種が採集されたので報告する。

1. *Siagonium gracile* SHARP

1 ♂, 5 ♀ ♀, 川田附近, 7. vi. 1983, 長谷川道明採集。

2. *Creophilus maxillosus* (LINNÉ)

1 ♂, 里, 10. vi. 1983, 長谷川道明採集。

本種はベートトラップ(魚肉)セット後二日目に得られた。

3. *Sepedophilus germanus* (SHARP)

1 ♀, 川田附近, 7. vi. 1983, 長谷川道明採集。

なお、本誌 59 号に登載の「対馬から新記録のハネカクシ追加 2」は、筆者の不注意によって「ハネカクシ科分布資料 9」と記されたが、「ハネカクシ科分布資料 10」の誤りにつき訂正する。

(東京農大, 渡辺泰明・長谷川道明)

○対馬からのヒレルチビンデムシの記録(矮埋葬虫科分布資料 1)

筆者は今春、長崎県対馬でチビンデムシの採集を行ったが、雨に祟られ結果は貧弱なものであった。それでも次の種を得ることができたので報告する。なお「対馬の生物(1976)」, および白水 隆(1980, 月刊むし(117): 65-88)によれば対馬から本科甲虫の記録は皆無である。

Catops hilleri KRAATZ ヒレルチビンデムシ

1 ♂, 上県郡峰村三根川流域, 31. iii. 1983。

腐肉トラップで得た。神奈川県産の個体と交尾器の形状を含め特記すべき相異はない。

上記の他、同日、上県町井口浜で落葉下から *longulus*-group の種と思われる 1 ♀ を得ているが、種名の決定は 8 個体が得られるまで保留せざるを得ない。(神奈川県綾瀬市, 西川正明)

○伊豆青ヶ島のゴミムシ

伊豆諸島南端の青ヶ島は、孤島ながらゴモクムシ族 2 種(アオガシマゴモクムシ, コバヤシツヤゴモクムシ)の模式産地として知られている。他のゴミムシ類については、HABU (1957)*, 衣笠 (1979)** が若干の種を報告しているが、筆者の手元にも同島未記録と思われる標本があるので報告しておく。

Agonum (Gyrochaetostylus) atricomis (BATES)

1 ♀, 7. viii. 1982, 中村俊彦採集。

Trichotichnus (Pseudotrictichnus) uenoi HABU

1 ♀, 19. vii. 1968, 小宮義璋採集。

ムナビロアトボシアオゴミムシ *Chlaenius (Pachydinodes) tetragonoderus* CHAUDOIR

1 ♀, 7. vii. 1982, 中村俊彦採集。

クロヘリアトキリゴミムシ *Parena (Parena) nigrolineata nipponensis* HABU

1 ♂, 7. viii. 1982, 中村俊彦採集。

なお、ウエノツヤゴモクムシは、模式産地の奈良県春日山の他は、鹿児島県屋久島に記録があるだけの珍しい種で、青ヶ島で得られたことは興味深い。

末尾ながら貴重な標本を恵与くださった小宮義璋博士ならびに中村俊彦博士に厚くお礼申しあげる。

* HABU, A., 1957. *Kontyu*, 25 : 66-71

** 衣笠恵士, 1979. 月刊むし, (104) : 46-47

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

○ナガサキクビナガゴミムシの新産地

ナガサキクビナガゴミムシ *Eucolluris litura*

(SCHMIDT-GOEBEL) は, HABU (1982) によると, ビルマ原産の種で, ジャワと日本にも分布している。日本では, BATES (1883) による "Nagasaki" の記録が唯一の, きわめて珍しい種と考えられていたが, 最近になって, 深町 (1978) が佐賀県小城郡小城町産の一頭を記録し, 約 100 年ぶりに日本本土より再確認された。

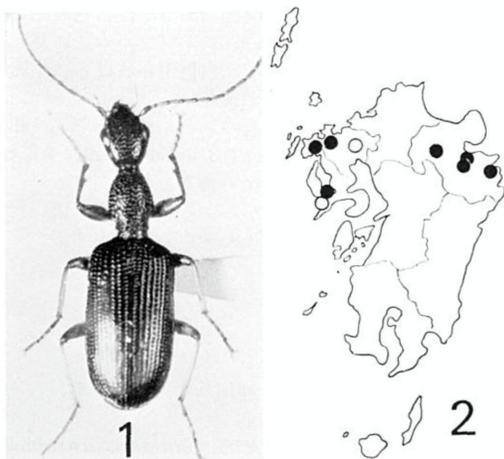
筆者らは, 九州各地 (北半分) で採集された本種を実検することができたので, 新産地として報告しておくたい。

○佐賀県伊万里市二里(5)町, 1 頭, 21. vi. 1977 ; 1 頭, 1. vii. 1979, 大石久志採集。

○長崎県世知原(2)町国見山, 1 頭, 4. vi. 1982, 松尾照男採集。

○長崎県長与町高田郷(3)北陽台高校, 2 頭, 2. vi. 1982, 江島正郎採集。

○大分県玖珠(4)町, 1 頭, 25. viii. 1980, 佐々木茂美採集。



右 1. 国見山産ナガサキクビナガゴミムシ

2. 日本におけるナガサキクビナガゴミムシの分布

(○: 文献記録。●: 実検記録)

○大分市塞田(5), 1 頭, 22. vi. 1980, 佐々木採集。

○大分市霊山(2), 1 頭, 30. vi. 1980 ; 1 頭, 24. vii. 1980, 佐々木採集。

○大分県津久見市四浦, 1 頭, 29. v. 1981, 佐々木採集。

以上10頭のうち, ビーチングで採集された国見山産と津久見市産以外は, すべて燈火に飛来したもので, あるいは, 北九州の平地や低山地に広く分布しているかもしれない。

末筆ながら, 貴重な標本を恵与され, また, 採集データの発表を許していただいた, 大石久志, 佐々木茂美, 江島正郎の各氏に厚くお礼申しあげる。

参考文献

BATES, H. W., 1883. *Trans. ent. Soc. London*, 1883 : 278

深町宗通, 1978. *Elytra*, 6 (1) : 36

HABU, A., 1982. *ent. Rev. Japan*, 36 : 85-90

(長崎県島原市, 今坂正一・長崎県江迎町, 松尾照男)

○東京都におけるマルアナニセツゾウムシの記録

マルアナニセツゾウムシ (新称) *Leptanchonus minatoi* MORIMOTO は, 和歌山県産の 1 ♂ と高知県産の 1 ♂ に基づいて, 昨年 MORIMOTO (1982) によって新属新種として記載された種類である。

今回筆者は, 東京農業大学の奥多摩演習林において採集された本種を検することができたので, ここに報告する。

1 ♂, 東京都奥多摩町東京農大演習林標高 1200 m (ミズナラ, クリ群集, 斜面の大石の下に伸びた根にしがみついていた。)

16. x. 1982 芝田靖孝採集。原記載によれば体色は暗褐色とあるが, 今回採集された個体は, 羽化後間もないのか黄赤褐色を呈していた。

和名はないが, 一見ツチゾウムシを思わせる形状を呈し, 体表には明瞭な円形の点刻を有することから, 筆者は本種に対して, マルアナニセツゾウムシという和名を提唱したい。

末筆ながら貴重な標本を恵与された芝田靖孝氏に感謝する。

(東京農大, 鈴木 功)



日本未記録のツツハムシ

小宮 義璋

北海道産のツツハムシ標本を整理していたところ
次のような日本未記録種を見出したので報告してお

く。
Cryptocephalus janthinus GERMAR, 1824

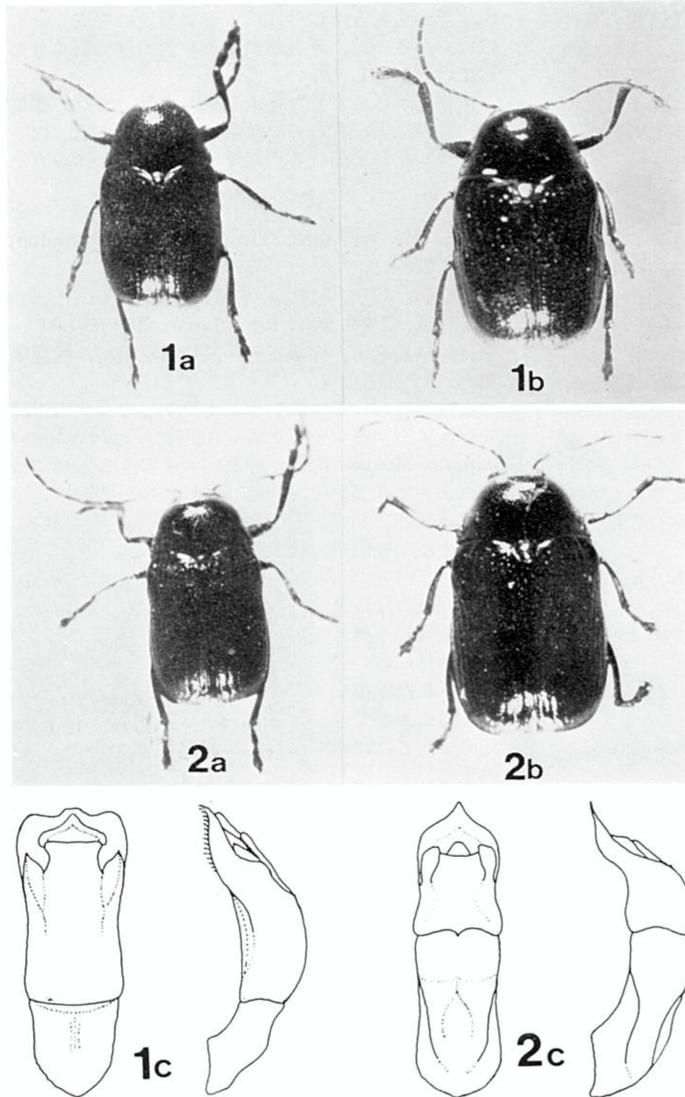


図 1. *Cryptocephalus janthinus* GERMAR
2. *C. obliquostriatus* MOTSCHULSKY a-♂, b-♀, c-♂ 交尾器

3 ♂♂ 2 ♀♀, 北海道サロマ湖畔
計呂地, 4. vii. 1963. 筆者採集。食
草: クサレダマ (サクラソウ科)。

本種はヨーロッパからシベリアに
かけて分布が知られている種類で、
C. obliquostriatus MOTSCHULSKY セ
スジツツハムシによく似ているが、
次の諸点で区別することができる。

1. 体型はより幅が広く、前後への
せばまりも強いため、長方形を呈す
るセスジツツハムシに比べてより丸
い体型をしている (図 1)。

2. 前胸は前方へ強く狭まり、特に
前胸側縁前部が下方へ曲り込むた
め、前縁角は背面から見えない。♂
では前胸背の点刻がセスジツツハム
シより大きく、翅鞘点刻列よりやや
小さい程度のもを密に装う。♀で
はセスジツツハムシと大差がない。

3. セスジツツハムシでは頭頂部は一
様に青ラン色であるが、本種では複
眼の内側に接して一対の黄色小斑が
例外なく存在する。

4. 触角は太く短い。♂でも翅鞘肩
部を超える程度で、6~8 節の長さ
は幅の約 2 倍程度 (セスジツツハム
シでは約 3 倍)。

5. 前胸前側板及び前胸腹板は粗大
な点刻を密布する点ではセスジツツ
ハムシと同様であるが、白色長毛を
密生するセスジツツハムシに対し
て、本種では白色毛がまばらに生え
ているにすぎない。

雄交尾器のスケッチを図 C に示
す。体長は♂3.3~3.35mm, ♀3.8
~3.85mmである。

末筆ながらいろいろ御教示頂いた
滝沢春雄氏に感謝の意を表する。

(東京都文京区)

コガネムシ 2 種の冬期採集例

成虫越冬の状態にある、以下のコガネムシを採集
しているので記録しておく。いずれも筆者が道路脇
の低い崖より、主にオサムシ類を採集している時に
土中より得たものである。

1. ムラサキツヤハナムグリ *Protaetia cata-*

phracta ARROW: 1 ♂, 静岡県田方郡函南町, 7. i.
1982.

2. アカビロウドコガネ *Maladera castanea*
ARROW: 1 ♂, 静岡県熱海市桜木町, 2. i. 1978. 1
♂, 23. xii. 1977.

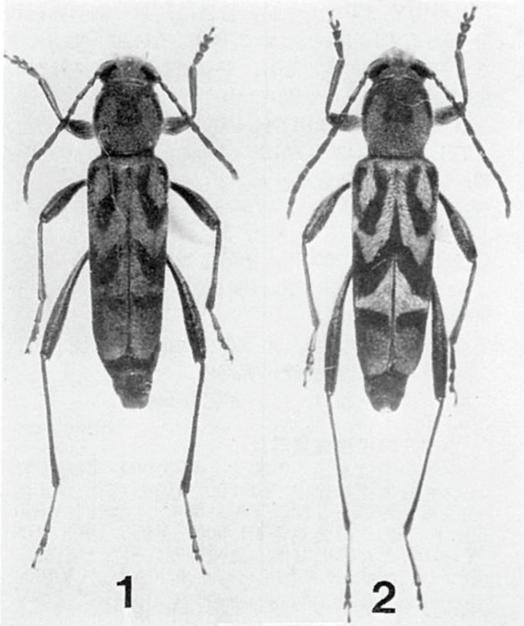
(東京都港区 境野広行)

キンケトラカミキリの翅鞘黒帯紋の一変異について

新里 達也*・武田 雅志**・松本 裕一***

キンケトラカミキリ *Clytus auripilis* BATES は、我が国の北海道より九州、および佐渡・粟島・隠岐などに分布し、主に低山地から山地にかけて、ケヤキの伐採木や各種花上に普通に見られるトラカミキリである。本種は一般に斑紋の変異の少ない種であって、わずかに上翅後帯紋が分断され点状になる *ab. torigaii* OHBAYASHI が知られているに過ぎない。しかしながら前胸背の黒色紋についてはかなりの変異があるようで、中央と両側中央前にある紋はそれぞれ完全に分離するものから、前方が伸長して互いに接続するものまで種々の段階での変異が見られる。これらは地域によっては多少出現する型に偏りが見られるようだが、むしろどちらかと言えば各地域の個体に連続的に表われる変異である。

最近、筆者の1人松本は千葉県安房郡富山(標高350m)において、ケヤキの枯枝からの割り出しにより、本種11頭を得たところ、そのうちの半数以上にあたる4♂♂2♀♀の個体が写真に示すように翅鞘中央の黒帯紋の短縮したものであった。すなわち、この中央黒帯紋は通常の場合では外縁から会合部に向けて前方へ延びる完全な帯となるが、富山で得られた数個体ではそれが会合部に届かず、その直前で終わる不完全な帯紋となっている。



1. *Clytus auripilis* BATES キンケトラカミキリ (短紋型)
2. 同(原型)、いずれも千葉県富山産。

このような翅鞘黒帯紋の変異は筆者らの調査した限りでは他地域の個体には見出すことはできず、今のところ富山の個体群にのみ特有に現われるものなのである。そして興味あることは、この変異を示す個体が富山で得られたキンケトラカミキリに非常に高い率で出現しているという事実である。後記する検視標本のデータで示すように、松本は1982年の4月・11月・12月に本種を得ており、そのほとんどの採集日において通常の個体並びに中央黒帯紋の短縮した個体(短紋型)をほぼ半数ずつ得ている。

房総半島は新生代以降、三浦半島と接続した半島の時代、房総島として分断された島嶼の時代、そしてさらに現在も半島として依然島嶼的性格を持ち続けていることから、この地域に隔離され、特異な変異を示す昆虫は少ない。甲虫類ではカズサオサムシ *Carabus lewisianus awakazusanus* ISHIKAWA やアカオサムシ *Carabus insulicola nishikawai* ISHIKAWA などが有名で、その他数種の固有の変異を示すものが知られている。一方、房総半島はその起伏の少ない地形環境にもかかわらず意外な山地性の種類を産することも良く知られたことである。事例をカミキリムシ科に限れば、ミヤマムリハナカミキリ *Anoprodera azumensis* MATSUSHITA et TAMANUKI、オオトラカミキリ *Xylotrechus villioni* VILLARD や今回のキンケトラカミキリの生息が知られている。これらの種類の産地は房総丘陵に局在し、もとより他県の産地からは半島基部より広がる広大な平野に阻まれ、遠く隔離されている。ちなみにキンケトラカミキリの千葉県下の記録は、富山を除けば三石山の1例(山崎秀雄, 1980, 千葉県生物誌, 30:9)があるに過ぎない。これらの山地性種にあっては、より強く隔離機構が働くと考えられ、特有の変異を持つ集団へと進化する可能性は十分考えられよう。

このキンケトラカミキリの短紋型がはたして房総半島に固有のものであるかどうか現状では断定はできないが、今後周辺地域を含めた調査から明らかにしていきたいものである。

検視標本: 2♂♂(短紋型1♂), 5. iv. 1982; 1♀3♀♀(短紋型1♂1♀), 21. xi. 1982; 1♀, 28. xi. 1982; 3♂♂1♀(短紋型2♂♂1♀), 5. xii. 1982. すべて松本採集・標本保管。

終わりに、本文を草するにあたり、キンケトラカミキリの変異について御助言を戴いた高桑正敏氏をはじめとする多くの方々、標本写真の撮影に協力された林 聡彦氏に深くお礼申し上げます。

(*東京都板橋区, **東京都目黒区, ***千葉県館山市)

○アラメハナカミキリの異常型

アラメハナカミキリ *Sachalinobia koltzei* HEYDEN は、かつては稀種であったが、近年になって富士山、日光などでその生態の一部が明らかになったことにより、かなりの個体数が採集されている。しかし、翅鞘斑紋の異常を報告するものはなく、斑紋はきわめて固定していると考えられる。



そこで、古い標本であるが、きわめて珍しいと思われる翅鞘斑紋の異常型を報告しておく。

1♀、長野県八ヶ岳、夏沢峠 5. vii. 1958, 向井良成採集。

アラメハナカミキリの翅鞘には、一本の黄褐色の

横帯があるのが普通だが、本個体は、翅鞘の前半部が黄褐色で、翅端側の 1/3 ほどが黒褐色である。小楯板は黒色。肩部が僅かに黒褐色になる。頭部、前胸背、腹部、触角は黒色。全肢は腿節が赤褐色で、脛節以下は黒色である。

貴重な標本をご恵与くださった、向井良成、笠原須磨生の両氏にお礼申し上げます。

(東京都中央区、中村俊彦)

○伊豆・淡島の *Onthophagus*

淡島(あわしま)は伊豆半島西岸の内浦湾内にうかぶ小島である。周囲 4km, 面積 15万m², 最高点は海拔 133m あり、島は全体として天然林がよく保存されていて、海岸性の照葉樹の大木が茂っている。伊豆半島への最も近いところ(沼津市内浦重寺)とは約 230m ばかりはなれており、この間は海上ロープウェイでつながれている。島全体が淡島海洋交園の名で遊園地となっていて、たくさんのインドクジャクが放飼され、生態系が大きく破壊されている。他に水族館や小動物園、さらにイルカ類の飼育海面などがあって、その部分の自然環境の破壊は徹底しているが、島の上部にはかなり良好な自然系がのこされている。

インドクジャクの糞より下記の *Onthophagus* 2 種を採集したので記録しておく。

採集データは共通 1982年 7月27日, 石田正明採集。

1. *Onthophagus atripennis* WATERH. コブマルエンマコガネ, 2♂1♀, (標本番号 IM-469~471)

2. *O. ater* WATERH. クロマルエンマコガネ, 2♂1♀, (標本番号 IM-472~474)

(東京都杉並区、石田正明)

◇〈連絡・報告〉「甲虫目録第5輯」の販売

「日本産甲虫目録」第5輯が発刊されましたので、内容および販売方法等についてお知らせ致します。

No. 20 ナガハナノミ科(佐藤正孝) 5頁; No. 21 テントウダマシ科(佐々治寛之) 8頁; No. 22 ハムシ科[コブハムシ亜科, ツヤハムシ亜科, ホソハムシ亜科](木元新作) 3頁; No. 23 チビシデムシ科(西川正明) 6頁; No. 24 カミキリムシ科[カミキリ亜科](林匡夫) 32頁。

上記の各号は分冊せず第5輯として一括販売することとし、販売については既刊と同様、東京通販サービス社にすべてを委託することになっておりますので、購入を希望される方は直接同社宛にお申し込み下さい。

販売価格は1セット (No. 20~No. 24) ¥. 2,500

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

(送料別 ¥. 250) ですが、会員は同封の割引券を利用すれば(1回限り) ¥. 2,000 (送料別) で購入することが出来ます。なお、東京通販サービス社への連絡は下記の通りです。

※156 東京都世田谷区千歳局私書箱33号

Tel. (03)-426-6012 郵便振替 東京 0-73, 156 東京通販サービス社。

甲虫談話会

会費(一ケ年)2000円、次号は12月下旬発行予定。

投稿〆切は10月30日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,500, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第二地帯 ¥1,500, ¥950, 第三地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥160)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03)811-4547, 振替 6-113479